
つれづれ（８）境越え

土堀 友

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つれづれ（8）境越え

【Nコード】

N33920

【作者名】

土堀 友

【あらすじ】

生と死の境を考える

そこに境はあるのだろうか

私の魂が永遠であるならば、そこに境はない。

むしろ、生きている今こそ

乗り越えなければならぬ境を感じる。

2010年10月14日 木曜日、夜

一ヶ月ぶりの文学講座だ。

今月は「小川国夫の境越えにつて」というテーマで講義を受けた。まず、一家心中事件の新聞記事を取っ掛かりとして話が始まった。生の世界が終わるところ（境）から死の世界がはじまる。その境を意識して越えるか、又は意識せずにして漫然と越えるかということ、生きていることの大切さが浮き上がってくる、という内容だった。心中事件は後者の考え方で、一家団欒の状態のまま、つまり生の世界そのままに、この世の苦しみから逃れようと練炭のガスを吸って楽に境越えを試みたものだという。

次は藤枝静男の一家団欒という作品について、死の世界から描いた話であった。普通の男がバスに乗って行くところから始まって、実はその男は献体を済ませ、目は義眼であった。行く先は先祖が待つ墓の中で、そこで仲良く暮らす。そして墓の中から出てきて祭りに出かけるというリアティーの世界とバーチャリティーの世界がごく自然に切り替わるという不思議な話であった。志賀直哉に傾注していたとか、あちらからこちらを見た場合、どうなるかといったことを考えさせられる話だった。

次の話は、生と死に人格を与えてせめぎ合い、どちらが勝つかということでストーリーが展開するという内容だった。死を求める男に惚れた姫がその男について行くが、姫を慕う男が連れ戻そうとして、死を求める男と戦いになる。そして男が勝利し、姫を生の世界に連れ戻すという内容だった。ストーリーを展開させる観点からは参考になる。

もう一つ興味を引いた事は「口語体の文章よりも文語体の文章のほうが読んだあとが残る」という言葉だった。文語体はよく分らな

いが、リズムがあり読んで気持ちのよい文章に出会うことがある。その事を指すのであろうか。

小川国夫の人物に見る境越えという本論部分（一番おいしい話）は、時間が無くて「次の機会に」ということになった。誠に惜しい気がした。私は新参者でもあるし、内向的な性格でもあることから、講座終了後の質問の時間も静かにしている。こんな時に積極的に行動出来たら素晴らしいことと思うが、どうも駄目である。「これも性格だね」と諦めてしまう。

帰りの車中では、もし講師と話ができたなら、こんな話をしただろうと想像してみた。

「それでは何か質問はありますか」

「はい、先生。これは作者が仕掛けた罠だと思います。生の世界が終わったならそれで終りです。死の世界が始まることは無いと考えます」

「それでは境を認識できませんね、ストーリーの展開も無い。あなたは志賀直哉の作品を読んだことがないのですか」

「私には文学的な教養がありません。先生の話を聞いて直感（インスピレーション）したのです」

「それではどのように考えてストーリーを展開させますか」

「生の世界は舞台です。そこに内なる世界と外なる世界が存在します」
バックランド

「なるほど。内なる世界から外なる世界に旅立ったり、外なる世界から内なる世界に帰ってきたりするのですね」

「そうです。そこにおける境は『行き来する』ということです。生と死の境は一方通行です、罠を見破るキーワードはそこにあると思います」

「世界とは心のことですね、生きていればこそ感じる風鈴の音のような」

「はい、全てのことに当てはめることができますと思います」

境越え

君は友を信じるか、僕は信じない

友は君を信じるか、そうは思えない

僕は自分を信じる、裏切られても一人で生きて行く自信がある
しかし、僕の心は悲しみに満ちている

君の傍に座り友を信じよう

裏切られても構わない、そのように思うと楽になる

城山の夕日は紅に染まり

落日の城下町は黙して語らず

僕は展望台に立ち、遠く太平洋を望む

友情とは、ただ祈ることのみ

あした友と語らん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3392o/>

つれづれ（8）境越え

2010年10月16日08時53分発行